連携先世界遺産：　醍醐寺
醍醐寺三宝院殿堂 表書院 付設上便所について
最新町石研究資料を広く伝えるプロジェクト

上醍醐・下醍醐の見学、上便所の清掃・実測・歴史に関する考察等

■受講生

安倍 彩結花・田上 楓（京都橘大学・文学部歴史遺産学科・４回生）・畑 友剛・久田 陸斗（同・３回生）・乾 志帆・岩佐 優那・内田 千歳・小田 優花・小田 祐太・小野 立樹・北尾 羽菜・小島 誠司・重僧 空阿・竹本 有希・田口 春菜・寺尾 このみ・徳永 悠人・冨江 瞬成・羽間 綾音・平居 由衣・望田 昇太・山上 寛弥・山崎 渓斗・山下　堅大・渡邉 正大（京都橘大学・文学部歴史遺産学科・２回生）・原田　桃百（立命館大学・４回生）・前田　千菜都（京都女子大学・２回生）

■担当教員

小林 裕子　村上 裕道（京都橘大学・文学部歴史遺産学科・教授）中久保 辰夫（同　准教授）

活動目的・概要

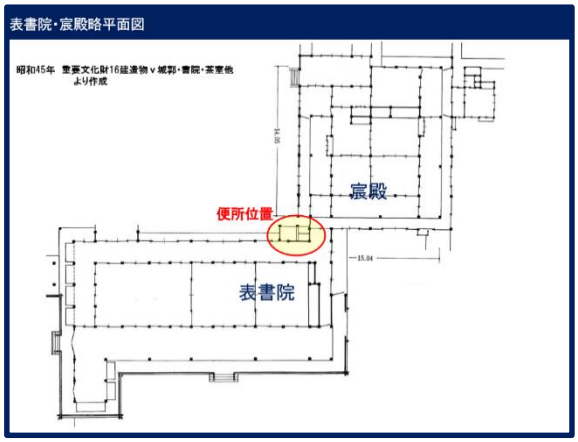
国宝　醍醐寺三宝院殿堂　表書院　付設上便所の由来について

１）三宝院表書院東北角に上便所が付設されている。三宝院明和古図（1769）には表書院東北角に上便所は所在しない。醍醐寺においては、現在、同所に上便所が所在することを知る者は少なく、さらに、その由来、建設時期について、知る人はいない。　　注１　三宝院明和古図（1769）

２）今回、この上便所の建設時期、形式・規模及びその建設目的について調査を実施した。

最新町石研究資料を広く伝えるプロジェクト

３）2022年度より継続実施してきた町石の三次元計測を完了し、さらに刻名の願主について検討した。



← 上便所位置図

全く使われていない上便所の調査のため、清掃からはじめる

◆主な活動

2024.9.19　ガイダンス
2024.9.23　上醍醐登山と堂宇見学
2024.9.28　醍醐寺での講義及び見学
2024.10.17　町石願主に関する検討開始(～12.8)
2024.10.28 同寺三宝院殿堂　上便所掃除
2024.10.30 三宝院殿堂に関する資料調査
2024.11.4　同　上便所掃除及び実測、町石追加調査
2024.11.6　三宝院殿堂に関する資料調査及び図化
2024.11.11　資料調整会議
2024.11.13　資料とりまとめ
2024.11.18　成果物の作成準備会議
2024.11.20　醍醐寺の補足調査
2024.11.25　成果物作成会議
2024.11.25 中間発表
2024.11.26～30　発表資料の作成
2024.12.1　発表資料作成
2024.12.2　成果発表準備
2024.12.5　調整会議
2024.12.8　世界遺産関係者と振り返り、発表

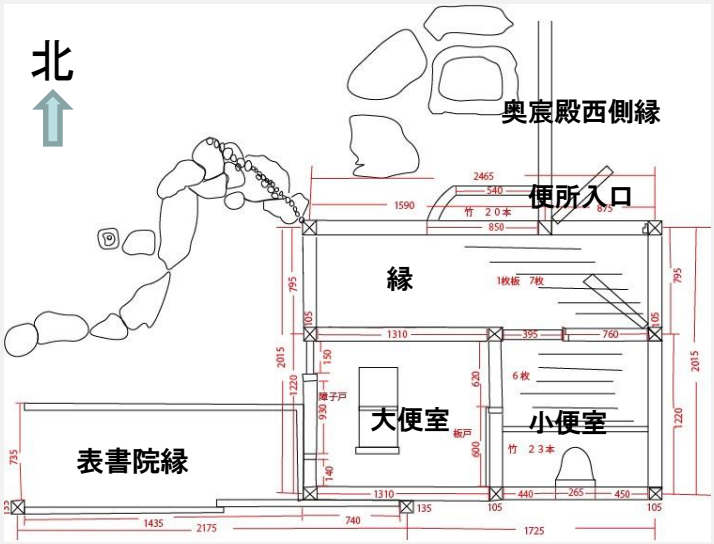
活動の成果

表書院 付設上便所の実測成果

構造型式：木造平屋建、桁行2465㎜、梁行2015㎜、片流、亜鉛鍍鉄板葺

上便所は表書院北東角の縁に張り出し、表書院軒下に亜鉛鍍鉄板葺の片流屋根を差し込む。表書院北東角から杉戸を開けて奥辰殿南西角の縁に至り、同縁西面の杉戸を開けて縁に出て、南側に便所入口の片開扉を構えます。上便所は北に縁を付し、東に小便室、西に大便室を設えます。便所片開扉前の便所縁は西に続き、北側庭に手水鉢を据えています。小便室床は板張で、小便器手前を竹敷とし、壁下部は腰板張、同上部は土壁塗、天井は鏡天井とします。

大便室境に片引き板戸を入れ、大便室中央に漆塗りの大便器を据えて床は畳敷とし、壁下方は巾木を張り、上部を土壁塗、天井を格天井とします。床下は、モルタルで加工した半円形の肥溜めを作り出し、最低部には、一部円形の凹部を作り出しています。モルタルにシミ等一切なく、使った形跡が確認できませんでした。



上便所実測平面図

表書院 付設上便所に関する考察

（１）建設時期

①　三宝院明和古図

明和6年（1769）の資料には三宝院殿堂表書院の記載が確認できるが、同殿堂 宸殿及び上記の付設上便所の記載なし

②　痕跡調査

表書院の北東角の柱は、表書院当初柱材（黒）、宸殿の当初柱材（緑）及び表書院と宸殿の接合部にみられる中古柱材（赤）、そして、それより新しい上便所新材（青）の4種に分類されます。

表書院柱は、柱径4寸３分、5分面。宸殿柱は4寸5分、5分面。中古柱材は、4寸3分、3分面の表面がやや明るい柱です。同材の挿入位置から考えて、宸殿が現在位置に移築されてきたときに挿入されたものと推量されます。なお、宸殿については、明治30年（1897）の指定時には既に現在地にあったことから、明和６年から明治30年までの間の移築と考えられます（京都府文化財保護課聞き取り）。

表書院北東部大虹梁の下面の漆喰壁が除去（漆喰壁痕が下面に残る）されており、表書院東北角の当初柱の上部には壁小舞の穴が残るかことから、現在の表書院北通の西側と同じく、同所も垂壁が下がっていたものと考えられます。その整備の時に、赤印箇所の漆喰壁が塗られ、宸殿側へ通じる杉戸が整備されたものと考えられます。なお、上便所内の柱径は3寸5分で糸面とし、柱表面の風化はほとんどなく新しい印象です。

注２：付設上便所　表書院・辰殿境略平面図（柱種類表記）

③　三宝院修理工事略誌、及び、国宝・重要文化財三宝院殿堂修理工事報告書

三宝院修理工事略誌によると、三宝院は大正12年(1923年)～大正13年（1924年）に解体工事が実施され、全ての柱は一時、取り解かれ、壁は全面新たに塗り直しをされたことがわかります。

昭和45年修理工事報告書によると、「表書院は外部の正面と西側面の内法長押上部と亀腹の塗変えを行った。」と記載されており、付設上便所廻りの壁は塗り直しされていないことが判ります。

注３：三宝院修理工事略史（同表書院上便所東面漆喰壁にビス止め）

注４：国宝・重要文化財三宝院殿堂修理工事報告書（京都府教育委員会編集　昭和45年発行　京都府立京都学・歴彩館所蔵）

④　上便所詳細調査

１）土台等に古材の転用が見られますが、柱の一部を除いて床上部の部材は全て新材を使っています。なお、前述のとおり、東側の漆喰壁の柱に比べ、細く、面も糸面と仕上げも異なりました。

２）上便所東南角の中古柱から西へ6尺5寸の位置に柱が立つが、同柱は当初柱で、同区間は漆喰壁です。同壁は、現在の上便所ができる前からのものであり、少なくとも宸殿が接合され、中古柱が挿入された時以前の仕事と思われます。なお、同当初柱から上便所西端までは板壁となっています。

３）上便所の継手仕口を見る限り、上記漆喰部分の柱を除いて、一連の工事として建てられており、現在の仕口痕や釘穴等に遊びの箇所が見られません。現在の上便所は、一度に建設されたものと考えました。

４）上便所南西角の柱は、表書院縁側の内法長押に払い込まれており、表書院へ後入れとなっています。

５）表書院・上便所接合部の壁の内、上便所側内壁の荒壁の返塗ができていません。つまり、表書院側から下塗をして、上便所側は内壁を張っていることから手が入らなかったのです。

５）上便所は、表書院の大正13年保存修理工事の後に付設されたことが判ります。

６）建設時期は、漆喰壁の塗工程から考えて、表書院とほぼ同時に壁を塗ったことが考えられることから、上便所の建設は、表書院が復旧竣工した大正13年と同時と推定いたします。

注５：荒壁写真等

（２）建設の目的

現上便所の東南角に南側6尺5寸、東側4尺の鉦折に漆喰壁が残っています。推測の域を出ませんが、その寸法は便所の平面寸法に合いそうです。但し、上便所としてはやや寸法が小振りで手狭なことから、大正13年に建て直したかもしれません。表書院の解体修理の時期に賓客を迎える計画があったのではないかと考え、調査をしました。

醍醐寺録から大正19年（大正13年の記述のため、19年と記載）に醍醐天皇の没後1000年の遠忌を執り行う計画で、境内建物の一連の再整備を行ったことが判りました。

その一連の整備として、三宝院表書院が大正12～13年に整備がされていたこともわかりました（寺録と三宝院修理工事略史と時期は一致しており、目的も明確となりました）。寺への聞き取りでは、宮家の来訪を想定したらしく、賓客が来られる際の対面の場である表書院・宸殿に最も近い位置に元々あった上便所を設えなおしたのではないかと想定しました。

活動を振り返って

上便所について言及している資料がほとんど見つからず、実測調査の結果と少ない周辺資料から便所の建設時期 や 理由を考察するのはとても難しかったです。お寺の方と、担当の先生方のサポートがなければこのような考察結果に至ることはできませんでした。

なお、上便所は最近使っていなかったことから、入ることさえ難しい状態でした。実測調査をするために2日間皆で掃除をいたしました。文化財の調査とは、こういうことも含まれているんだと初めて知りました。（BNJ班）

町石に名前が刻まれた僧は、同名の人物が複数みつかったりと難しい側面もありましたが、町石そのものの年代推定とともに絞り込んでいく作業は、謎解きのような楽しみもありました。（町石班）

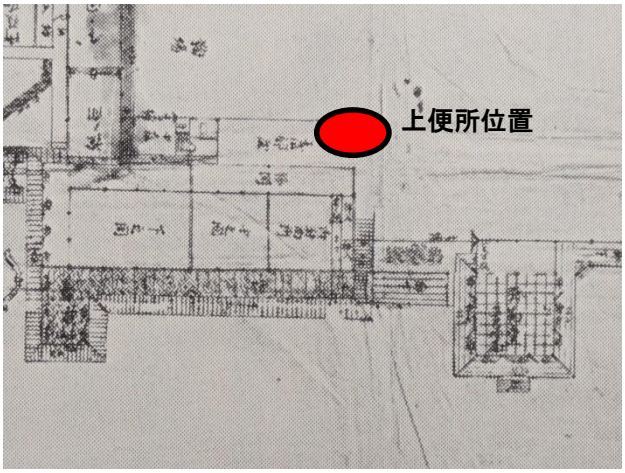
担当教員からのコメント

村上　裕道　今回の醍醐寺PBLでは、昨年度に続いて、町石の補足調査（記載の僧侶等の人物調査）と本年初めての醍醐寺表書院の東北角に張出す上便所について、建設時期及びその建設目的の調査を実施しました。なお、この活動報告では上便所に関する成果を中心にまとめています。

中久保　辰夫　上醍醐に至る町石は、鎌倉時代後期と江戸時代前期に建立されましたが、鎌倉時代後期の願主を中心に検討しました。この授業ではじめて解読できた僧名もあり、1270年代前後に活躍した僧たちが町石の造営に深くかかわっていたことがわかりました。粘り強い学生の努力が実ったと思います。

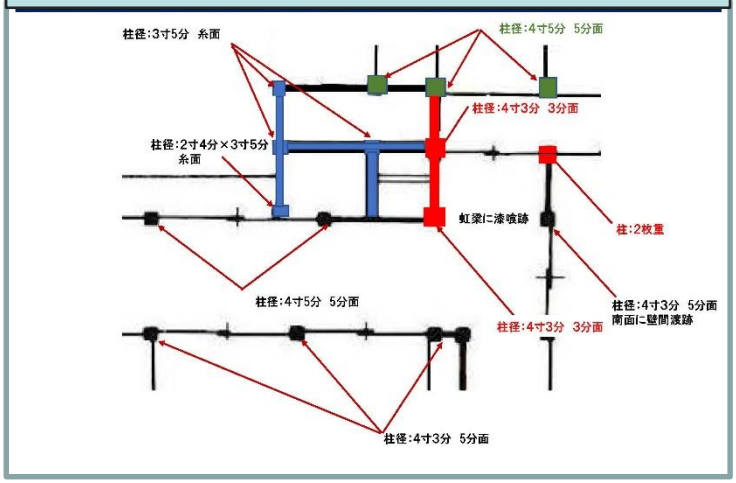
活動資料

注1：三宝院明和古図（1769） 表書院部分抜粋



日本建築基礎資料集成　一六　書院Ⅰ
中央公論美術出版　昭和46年10月30日発行

注2：付設上便所　表書院・辰殿境略平面図（柱種類表記）



注3：三宝院修理工事略史

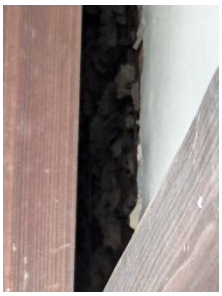
修理工事略誌

特別保護建造物三寶院表書院ハ慶長年間豊臣秀吉ノ造營ト稱ス明治三十年特別保護建造物ニ指定セラレシガ輓近屋根大破ニ及ビ軸部亦腐朽弛緩シタルヲ以テ古社寺保存法ニ基キ根本的修理ノ設計ヲ樹立シ國庫ノ補助ヲ得テ大正十二年十二月十九日起工仝十三年十一月十六日竣成セリ修理施工ノ方法ハ専ラ舊形ノ維持ト古材ノ保存トヲ旨トシ建物一旦解放ノ上基礎地形ヲ完全ニナシ柱及椽廻リ等ハ接木刳木ヲ施シ再用ニ供シ床下及小屋材ノ大部分并ニ東妻飾ノ諸材料ハ腐朽酷シキヲ以テ新材ニ取換ヘ屋根瓦破損ノモノ補足シ檜皮葺ハ新規ニ葺替ヘ飾金具破損ノ分ハ舊形ニ倣ヒ補給其他ハ渾テ古材ヲ再用シ從来ノ形式手法ヲ嚴格ニ踏襲以テ堅牢ニ組立タリ

一金貳萬參千貳拾五圓四拾壹錢也　総額

京都府知事　池松時和
京都府技師　坂谷良之進
京都府技手　東　金五郎
現場主任技手　大浦徳太郎
仝　技術雇　板谷定一
三寶院住職　平之亮禪

注5：荒壁写真



左：便所内側
荒壁返し塗りができていない
右：縁長押への払い込み

上便所写真

西面全景

上便所の表書院への付設状況

東南角漆喰壁

南面東寄
手前の柱は当初柱

北面全景